

# 「子育て中の母親が期待する小児科診療所の 看護師の役割に関する実態調査」

広島文化学園大学看護学部

藤 尾 順 子, 山 内 京 子, 進 藤 美 樹

キーワード：子育て中の母親，期待，小児科診療所，看護師，役割

## ■ はじめに

近年，核家族化，少子化による子どもと接する経験のないまま母親になる，子育ての孤立化，育児情報の氾濫など子育てをする母親を取り巻く環境が大きく変化している。こういった厳しい環境の中で乳幼児を持つ母親たちは不安や困難感を持ちながら子育てをしている。

一般的な外来でなく，地域の診療所の小児看護に携わってきた中で，子育てがわからない母親・知識不足の母親が増え，各家庭のニーズに合わせた支援を考えなくてはならないとの問題意識を深める場面に多く出会ってきた。診療所は，開設した地域社会に根差して診療を行っており，どの医療機関に通院するにしても子どもは地域で生活しているので，地域を抜きにしての援助は考えることはできない<sup>1)</sup>と言われる。現在小児科外来の場を疾病の診断や治療の場としてのみでなく，家族にとって相談しやすい場，家族と一緒に育児を考え実践する場として提供し，支援する立場に立った外来への取り組みがなされてきている<sup>2)</sup>。小児科診療所の看護師もその一員として地域のなかで子どもを健やかに育てる役割がある。

これからの地域における子育て支援の拠点としての小児科診療所の看護師に子育て中の母親が何をどの様に期待しているのかを明らかにし，地域に根ざす小児科診療所の看護師に対する具体的な関わりの方向性を明らかにすることを目的に調査した。

## ■ 研究目的

子育て中の母親が小児科診療所の看護師に期待している内容を明らかにし，これからの小児科診療所の看護師の役割を検討する。

## ■ 研究方法

### 1. 研究デザイン

質問紙を用いた横断的調査研究

### 2. 調査対象者

各調査施設の同意を得られたA市内小児科診療所2か所を受診している0～3歳の子ども母親100名，B市内子育て支援センターを利用している0～3歳の子ども母親100名，H,K市内保育園2か所

ふじお じゅんこ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

に通園している0～3歳の子どもの母親97名を対象者とした。

### 3. 調査方法

小児科診療所では、受診した子どもの母親に調査票を受付で職員が配布し、回収は郵送とした。子育て支援センター及び保育園においては、施設を利用している子どもの母親に調査票を施設内で職員が配付し、回収は留置き法とした。

### 4. 調査期間

2014年5月22日～7月31日

### 5. 調査項目

#### 1) 母親の属性（6項目）

年齢、職業、学歴、家族構成、子どもの数、子どもの年齢

#### 2) 育児に関する内容（4項目）

育児の心配事の有無、育児で困ったときの対応、困ったときの相談者、看護師を相談相手に選ばない理由

#### 3) 子どもに関する内容（5項目）

子育て支援の施設の利用の有無、持病の有無、かかりつけ医の有無、かかりつけ医の場所、かかりつけ医を利用するときはどんなときか

#### 4) 小児科診療所の看護師にこれまでに指導・情報提供を受けた内容（複数回答）

先行研究を参考<sup>3,4,5,6)</sup>に、子どもの発育発達について（6項目）、具体的な育児方法について（5項目）、子どもの体調に合わせた育児方法について（6項目）、育児に関する地域の資源や情報の提供（7項目）、看護師の対応について（3項目）、予防接種について（1項目）の計28項目を設定した。

#### 5) 小児科診療所の看護師に相談したい内容・行ってほしい内容

4)と同様の28項目を設定した。

### 6. 分析方法

調査内容の全体は記述統計を用いて単純集計をおこなった。小児科診療所の看護師にこれまでに指導・情報提供を受けた内容と相談したい内容・行ってほしい内容の分析は、 $\chi^2$ 検定を行なった。

### 7. 倫理的配慮

本研究は、広島文化学園大学看護学研究科・看護学部倫理委員会の承認を得た（受付番号13012）後、調査依頼施設である子育て支援センター、保育園、小児科診療所の各施設長に研究の趣旨を説明し同意を得て、調査を開始した。調査対象者には書面に調査趣旨、研究への参加は任意、無記名による匿名性の確保及び本研究以外に使用しないこと、調査票の回収をもって調査への同意が得られたこととする旨を明記し調査を実施した。

## ■ 結果

調査票は子育て支援センター100部、保育所97部、診療所100部の計297部を配布し、子育て支援センター89部（89%）、保育園56部（57%）、診療所66部（66%）を回収できた。そのうち有効回答は子育て支援センター80部（90%）、保育園43部（77%）、診療所61部（92%）であった。

#### 1. 調査対象者の基本的属性

年齢は、30～39歳が最も多く、119名（63.9%）であった。職業は、専業主婦が93名（50.5%）、常勤・常勤（育休中）・パートを合わせた「有職者」が85名（46.2%）であった。最終学歴は大学卒業が56名（38.7%）と最も多く、短大卒業・大学院卒業を合わせると約6割をしめていた。中・高・専門学校卒業は4割であった。家族構成は夫婦と子どもが171名（92.9%）で9割以上が核家族であった。子どもの数は一人が最も多く91名（49.5%）、次いで二人が75名（40.8%）、三人は17名（9.2%）で、四人以上は1名（1.6%）であった。子どもの年齢は1歳が71名（38.6%）で最も多く、次いで0歳が67名（38.6%）、

2歳が50名(27.2%), 3歳が38名(20.7%)であった(表1)。

2. 育児の心配事と育児で困ったときの母親の対応とその相談相手  
 育児の心配事が、「あり」は133名(72%)で「なし」は50名(27%)であった(図1)。育児で困ったときの対処法は「何もしない」が2名(1.1%)で、ほとんどの母親が「誰かに相談している」179名(93.7%)であった。次に多いのが「インターネットで調べる」142名(77.2%),「育児書を読む」52名(28.3%)であった(図2)。育児で困ったときの相談相手は、「友人・知人」が141名(78.8%),「自分の両親」が138名(77.1%),「夫」が129名(72.1%)とそれぞれ7割以上いた。「看護師」が相談相手であると答えたのは10名(5.6%)であった(図3)。

3. 看護師を育児の相談相手として選ばなかった理由

看護師を育児の相談相手に選ばなかった理由としては、「看護師は育児よりも病気の時の相談相手である」79名(46.4%),「看護師に育児の相談をしていいかわからない」67名(39.4%),「いつも忙しそうで相談しにくい」38名(22.3%), その他52名(30.5%)であった(図4)。

その他の理由としては、「親に聞いて分からなければ病院や看護師に聞く」、「相談する看護師が特にいない」、「病院に行く機会がないので看護師に会う機会がない」、「相談するタイミングがない」、「普段あまり病院に行かない。頭に浮かばない」、「気軽にできない」、「身近に相談できる人がいるから」、「病気でないときに病院へ行くことがない」、「病院に行く機会はあまりないため、タイムリーに相談はできない」、「なんか怒られそう。厳しそう」、「思いつかなかった」、「看護師が身近に居ない」、「直接看護師と話すことはほとんどない」、「診察室に案内されるだけ」、「そのナースが育児を経験しているとは限らず、やはり経験者からアドバイスをもらいたいの」、「病気以外では話しにくい。その程度の悩みなので」、「自分の中に看護師さんに相談する選択肢がなかった」、「看護師に相談するということが自体思いつかなかった」、「親や自分が看護師である」という記載があった(図4)。

表1 対象者の基本属性

全体 n=184		
項目	人数	割合(%)
<b>年齢</b>		
10歳代	0	0.0
20~29歳	47	24.9
30~39歳	119	63.9
40歳以上	18	11.4
<b>職業</b>		
専業主婦	93	50.5
常勤	29	15.8
常勤(育休中)	28	15.2
パート	28	15.2
その他	6	3.3
<b>最終学歴</b>		
中学校	3	1.6
高校	38	20.7
専門学校	39	21.2
短期大学	40	21.7
大学	56	30.4
大学院	7	3.8
その他	1	0.5
<b>家族構成</b>		
自分と子ども	4	2.2
自分と子どもと親	3	1.6
夫婦と子ども	171	92.9
夫婦と子どもと夫の親	1	.5
夫婦と子どもと自分の親	1	.5
その他	4	2.2
<b>子どもの数</b> (M=1.61, SD±0.68)		
1人	91	49.5
2人	75	40.8
3人	17	9.2
4人	1	.5
<b>子どもの年齢<sup>※</sup></b>		
0歳	67	36.4
1歳	71	38.6
2歳	50	27.2
3歳	38	20.7

※子どもの年齢は重複しているものがある

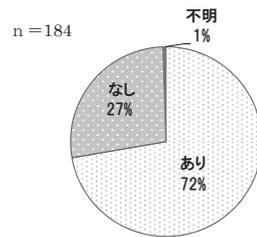


図1 育児の心配事

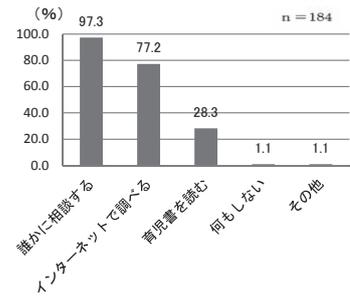


図2 育児で困ったときの対処法 (複数回答)

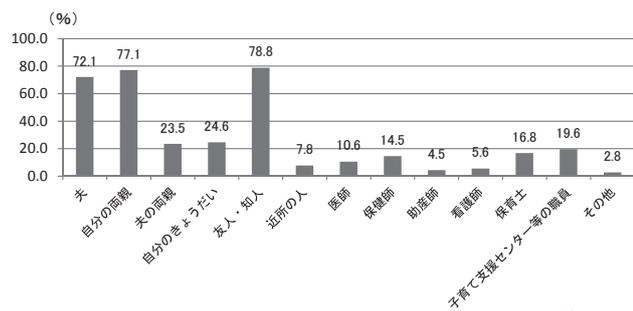


図3 育児で困ったときの相談相手 (複数回答)

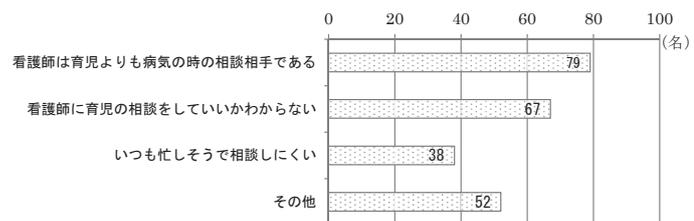


図4 看護師を相談相手に選ばなかった理由 (複数回答)

4. 持病の有無とかかりつけ医の有無

1) 持病の有無とかかりつけ医の有無

今回の対象者の約4分の1の子どもが持病を持っており、9割以上の母親が子どもにかかりつけ医があると答えていた。

2) かかりつけ医の場所、かかりつけ医の利用理由

「小児科だけの診療所」が7割以上で最も多く、約2割が「内科・小児科診療所」であった。「総合病院の小児科」はほとんどいなかった(図5)。

かかりつけ医の利用で多いは、「急病の時」160名(93.0%)、「予防接種」159名(92.4%)、次に「健康診断」と答えたのは112名(65.1%)であった。人数は少ないが、「不安を感じたとき」12名(6.9%)、「子どものことで相談したいとき」6名(3.4%)と、相談を目的にかかりつけ医を受診する母親がいた(図6)。

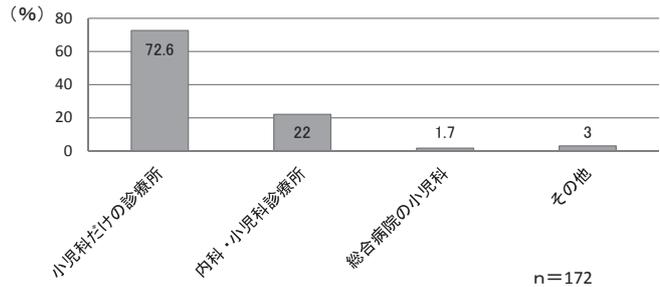


図5 かかりつけ医の場所

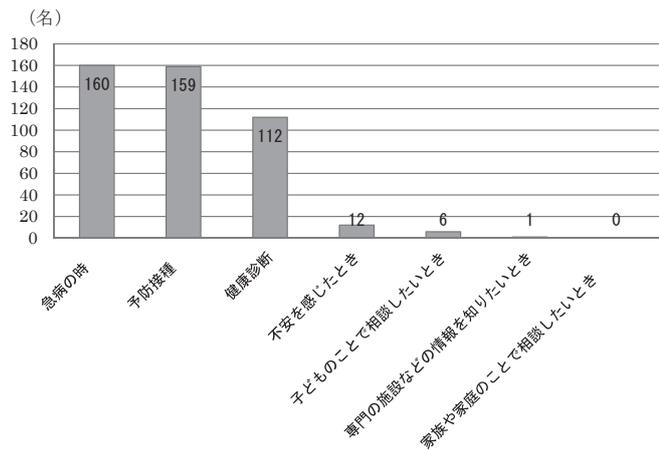


図6 かかりつけ医の利用理由(複数回答)

5. 小児科診療所の看護師から受けた指導と期待する相談内容

1) 小児科診療所の看護師から受けた指導

上位10項目のうち最も多かったのが「予防接種を受ける時期や順序」84名(45.7%)であり、約半数の母親が予防接種に関して小児科診療所の看護師から指導や情報提供を受けていた。上位10項目は、「薬の飲ませ方・座薬の入れ方」63名(34.2%)、「授乳の方法やおむつのかえ方、沐浴の方法など育児の手技」59名(32.1%)、「身長や体重などの体の発達」49名(26.6%)、「診察前に医師にたずねたいことの内容の確認」45名(24.5%)、「熱が出た時どうしたらいいか」41名(22.3%)、「下痢や便秘をした時どうしたらいいか」41名(22.3%)、「よくお乳を飲んでいないか、むら食いはないかなどの栄養」39名(21.2%)、「おむつかぶれや湿疹が出た時、どうしたらいいか」36名(11.6%)、「病気の時、受診するタイミング」32名(17.4%)であり、予防接種や子どもの体調変化への対処法、育児技術に関する項目が上位をしめていた。

下位10項目は、「乳幼児等医療費助成制度や児童手当などの経済支援の公的制度の紹介」、「子育て支援の場(育児サークルや育児教室など)に関する情報提供」、「子どもに合わせた遊び」、「病児保育園の紹介」、「母親同士が話をする場や機会の提供」、「継続的なカウンセリング(精神科医、臨床心理士など)の紹介」、「おむつはとれているか、トイレトレーニングなどの排泄の自立」、「保育園の紹介」、「ベビーシッターなどの紹介」、「叱り方などしつけの仕方」であり、主に育児に関する地域の資源や情報の提供に関するものであった(図7)。

2) 小児科診療所の看護師に期待する相談内容

上位10項目のうち最も多かったのが「子どもが病気の時の受診のタイミング」で96名(52.2%)であった。上位10項目は、「健康状態の見方」93名(50.5%)、「医師に聞けないようなささいな話についてしてくれる」85名(46.2%)、「熱が出た時、どうしたらいいか」80名(43.5%)、「下痢や便秘をした時どうしたらいいか」75名(40.8%)、「診察後の再確認のための説明についてしてくれる」

72名 (39.1%), 「診察前に医師にたずねたいことの内容の確認についてしてくれる」68名 (30.7%), 「おむつかぶれや湿疹が出た時どうしたらいいか」66名 (32.6%), 「おむつはとれているか, トイレトレーニングなどの排泄の自立」62名 (33.7%), 「叱り方などしつけの仕方」60名 (32.6%) で子どもの体調変化への対処法や排泄に関するもの等, 医学的・専門的なものであった。

下位10項目は「予防接種を受ける時期や順序」で「保育園の紹介」「病児保育園の紹介」「乳幼児等医療費助成制度や児童手当などの経済支援の公的制度の紹介」「子育て支援の場 (育児サークルや育児教室など) に関する情報提供」などの育児に関する地域の資源や情報の提供についての項目が多かった (図8)。

### 3) 小児科診療所の看護師から受けた指導と期待する相談内容の比較

小児科診療所の看護師から受けた指導と希望する相談内容で, 有意に差が認められたのは, 「栄養」( $\chi^2=4.752, p<.05$ ), 「衣服・室温の調節」( $\chi^2=5.219, p<.05$ ), 「健康状態の見方」( $\chi^2=11.557, p<.01$ ), 「発熱時の対処」( $\chi^2=14.968, p<.01$ ), 「下痢・便秘時の対処」( $\chi^2=17.828, p<.01$ ), 「おむつかぶれ・湿疹の対処」( $\chi^2=7.175, p<.01$ ), 「受診のタイミング」( $\chi^2=11.463, p<.01$ ), 「予防接種を受ける時期や順序」( $\chi^2=6.4, p<.05$ ), 「些細な話をしてくれる」( $\chi^2=9.752, p<.01$ ), 「診察前の確認」( $\chi^2=5.551, p<.05$ ), 「診察後の確認」( $\chi^2=7.594, p<.01$ ) であった (表2)。

## ■ 考察

### 1. 子育て中の母親の相談相手

母親の7割強が育児の心配事を持っており, その対処法として9割の母親が「誰かに相談する」という方法をとっていた。その相談相手は, 自分の両親, 夫, 友人・知人といった母親にとって身近な人によく相談している。子育て支援に関する専門職や医療従事者への相談は十数%でしかなかった。小児科診療所の看護師が相談相手にならない理由として「看護師に育児の相談をしいのかかわらない」「看護師に相談することを思いつかなかった」などあげていることから, 母親は小児科診療所の看護師を子育ての支援者としてあまり認識されていない。

子どもが病気になった時サポート者がいないと, 母親の不安が強くなることが明らかになっている<sup>7)</sup>ことから, 子どもが受診した時その母親に子育ての支援者がいるかどうかしっかり把握することが重要となる。特に子育て支援者がいない母親に対して, 小児科診療所の看護師は相談者であることを伝え, 母親への子育て支援の体制づくりの情報を提供するなどして, 家庭や地域で不安なく子育てできるよう支援していくことが急務である。

7割の母親が育児で困った時インターネットを利用していた。インターネットは, 最新情報をすばやく入手し, 情報交換できること, 時間や場所が関係なく必要な情報にアクセスできる情報収集するにはとても便利ものである。しかし, 母親にとって多様かつ膨大な情報の中から自分が必要とする正確な情報を選択することは容易でなく, 誤った情報に翻弄させる懸念もある<sup>8)</sup>。これからは受診してきた子どもの母親が子育ての情報をどこからどんな内容を得ているか, 小児科診療所の看護師も把握しておく必要があり, 正しい情報が子育てに役立てるよう援助していかなければならない。

### 2. 母親が期待する小児科診療所看護師の役割

小児科診療所の看護師から受けた指導と母親が期待する相談内容には違いを認め, 「健康状態の見方」「発熱時の対処」「受診のタイミング」「診察後の確認」( $p<.01$ ) の項目において看護師としての医学的知識に基づいた指導を期待しており, また合わせて「おむつかぶれ・湿疹の対処」「些細な話」( $p<.01$ ) の項目で基本的な育児技術や精神面での支援も期待している。

乳児が病気のときの対応方法や, 育児上困難なことがあったときには, 看護師や医師に育児に関する相談を求めている<sup>9)</sup> ように, 今回も母親は, 日常の育児に関する方法や子どもの体調に合わせた育児方法についての相談を期待していた。また, 乳児が病気の際や育児上の困難なことがあった際に看

「子育て中の母親が期待する小児科診療所の看護師の役割に関する実態調査」

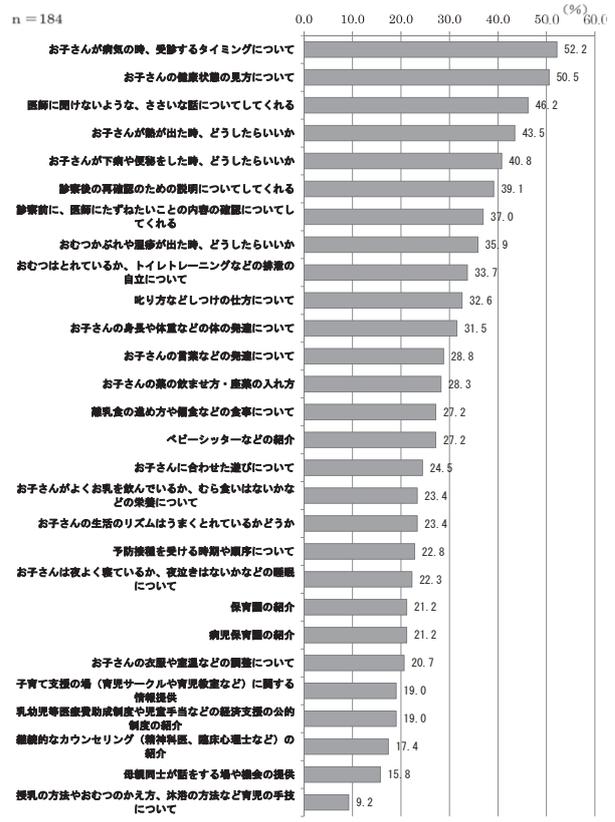
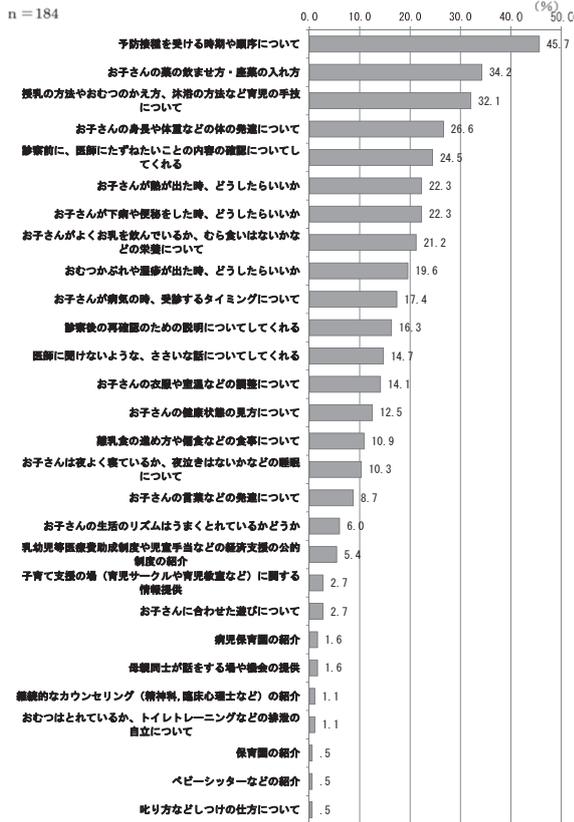


図7 小児科診療所の看護師から受けた指導 (複数回答)

図8 小児科診療所の看護師に期待する相談内容 (複数回答)

表2 小児科診療所の看護師から受けた指導と希望する相談内容の比較

項目	希望する相談内容		計	%	χ <sup>2</sup>	p <sup>1)</sup>
	あり (%)	なし (%)				
栄養 指導	あり	4 (9.3)	35 (24.8)	39	(21.2)	4.752
	なし	39 (90.7)	106 (75.2)	145	(78.8)	
	計	43 (100)	141 (100)	184	(100)	
衣服・室温 指導	あり	1 (2.6)	25 (17.1)	26	(14.1)	5.219
	なし	37 (97.4)	151 (82.9)	158	(85.9)	
	計	38 (100)	176 (100)	184	(100)	
健康状態の見方 指導	あり	4 (4.3)	19 (20.9)	23	(12.5)	11.557
	なし	89 (95.7)	72 (79.1)	161	(87.5)	
	計	93 (100)	91 (100)	184	(100)	
発熱時の対処 指導	あり	7 (8.8)	34 (32.7)	41	(22.3)	14.968
	なし	73 (91.3)	70 (67.3)	143	(77.7)	
	計	80 (100)	104 (100)	184	(100)	
下痢・便秘時の対処 指導	あり	5 (6.7)	36 (33.0)	41	(22.3)	17.828
	なし	70 (93.3)	73 (67.0)	143	(77.7)	
	計	75 (100)	109 (100)	184	(100)	
おむつかぶれ・湿疹の対処 指導	あり	6 (9.1)	30 (25.4)	36	(19.6)	7.175
	なし	60 (90.9)	88 (74.6)	148	(80.8)	
	計	66 (100)	118 (100)	184	(100)	
受診のタイミング 指導	あり	8 (8.3)	24 (27.3)	32	(17.4)	11.463
	なし	88 (91.7)	64 (72.7)	152	(82.6)	
	計	96 (100)	88 (100)	184	(100)	
予防注射指導 指導	あり	12 (28.6)	72 (50.7)	84	(45.7)	6.400
	なし	30 (71.4)	70 (49.3)	100	(54.3)	
	計	42 (100)	142 (100)	184	(100)	
些細な話 指導	あり	5 (5.9)	22 (22.2)	27	(14.7)	9.752
	なし	80 (94.1)	77 (77.8)	157	(85.3)	
	計	85 (100)	99 (100)	184	(100)	
診察前の確認 指導	あり	10 (14.7)	35 (30.2)	45	(24.5)	5.551
	なし	58 (85.3)	81 (69.8)	139	(75.5)	
	計	68 (100)	116 (100)	184	(100)	
診察後の確認 指導	あり	5 (6.9)	25 (22.3)	30	(16.3)	7.594
	なし	67 (93.1)	87 (77.7)	154	(83.7)	
	計	72 (100)	112 (100)	184	(100)	

<sup>1)</sup>期待度数が5未満の場合は、Fisherの直接法による検定結果である  
n.s.:not significant \*\*: $p < 0.01$ , \*: $p < 0.05$

看護師への相談を期待していたが、現在看護師が行っている子育て支援は十分でない<sup>10)</sup>との報告にもあるように、今回の結果も母親が期待する指導を受けることができている状況がみられた。

小児科外来の看護師は、初対面の子どもや家族に対して短い時間でも子育て支援が行えるように、普段から話しやすい雰囲気を作る必要があり、家族の方から必要なとき声をかけてもらえるようにするためにも、看護師の姿勢は重要となり、また看護師に行える子育て支援を家族に伝えていくという働きかけも必要との報告<sup>11)</sup>もある。今回も母親が小児科看護師に希望している「診察前に、医師にたずねたいことの確認をしてくれる」「医師に聞けないような些細な話についてしてくれる」ことを小児科看護師が再認識することが重要である。

小児科看護師に求める援助としては、医療に関する難しい指導・説明のような答えではなく「医師に聞けないような些細な話についてしてくれる」ような寄り添ってくれる関係であり<sup>12)</sup>、身近な人に相談し、答えを求めるよりも、専門的な知識をもっている看護師が返す言葉に安心感を求めている。また、今回の調査で「診察後の再確認のため説明してくれる」ことを希望している母親が多かった。これは、診察終了後に質問があるかどうか確認をして欲しかったかという調査項目に、そう思うと回答した家族が5割近くいた<sup>13)</sup>との報告からも、今日の小児科診療所において母親への十分な支援にはなっていないことが検証された。受診回数と説明されること、遠慮して質問することに関しては回数が多いことが必ずしも説明してもらえた、質問できるという母親の受けとめにはつながらない。受診回数よりも、医療者との関係が重要となる<sup>14)</sup>との指摘もある。小児科診療所の看護師は母親が安心して子育てを行えるよう支援するためには、母親との信頼関係が重要となる。母親に対して身近な相談相手であることを認識してもらうためにも、ささいなことを聞けずにいる母親に対し看護師が少しの時間でも寄り添い、子育ての不安の解決に向けて働きかける姿勢が必要となる。

## ■ 結論

子育て中の母親は、不安を抱えながらも身近な人に相談しながら日々の子育てを行っていた。小児科診療所の看護師を相談相手とは認識しておらず、7割の母親はインターネットを活用している一方、診療後の説明や、医師に聞けない話を聞いてほしいなど、寄り添ってくれる関わりを期待していた。

小児科診療所の看護師は、子育て中の母親が期待する関わりを再認識し母親に必要な支援が行えることが大切である。また、母親が安心して子育てを行えるために、小児科診療所の看護師は母親にとって身近な相談相手と認識できるような働きかけが必要である。

## 引用文献

- 1) 及川郁子：子どもの外来看護一病院・診療所における外来看護の役割をめぐって。東京：へるす出版，10，2009.
- 2) 吉永陽一郎：外来小児科での育児支援の取り組み。小児科診療 61(11)：68-72，1998.
- 3) 三品浩基ほか：個別乳幼児健康診査で母親が希望する保健相談内容の検討。小児科診療：74(6)，998-1002，2011.
- 4) 藤井和江：子育て支援にたいする母親のニーズ(2)：子育て支援施設および保育所の利用と子育て相談について。関東学院大学人間環境学会紀要 3，17-31，2004.
- 5) 齊藤 泉：小児外来に勤務する看護職が認識する育児支援。北海道医療大学看護福祉学部学会誌 9(1)：101-106，2013.
- 6) 伊庭久江ほか：医療機関の看護師が行う育児支援について。千葉大学看護学部紀要 26：19-26，2003.
- 7) 枝川千鶴子ほか：乳幼児の発病時における母親の不安と困ること及び諸要因との関係。小児看護 34：144-146，2003.
- 8) 井田 歩美ほか：子育て情報に関する母親のインターネット利用についての実態調査。

- 市町村子育て支援事業に参加した乳児の母親へのアンケート結果より. 母性衛生 53(4) : 427-436, 2013.
- 9) 堂前有香 ほか：乳児の母親の育児上の困難. 千葉大学看護学部紀要26 : 11-18, 2003.
  - 10) 前掲9)17
  - 11) 前掲6)19-26
  - 12) 広野優子ほか：小児科外来におけるコミュニケーションの向上のために (その2). -まず「見る」ことから始めよう. 外来小児科 4(2) : 260-261, 2001.
  - 13) 長谷川桂子ほか：診療所を受診する子どもの家族の医療者に対する期待. 岐阜県立看護大学紀要 2(1) : 55-61, 2002.
  - 14) 筒井真優美：外来受診した子どもの母親が医療者に情報提供を求める行動. 日本赤十字看護大学紀要 10 : 23-30, 1996.